

訳語は如何に継承されたのか——「熱帯、温帯、寒帯」再考——

沈 国 威

How the Terms Used in Translation Have been Succeeded
—Reconsidering : *NETTAI* (the tropical), *ONTAI*
(temperate), and *KANTAI* (frigid zones)—

Shen Guowei

The Catholic missionaries who came to China in late Ming and early Qing dynasties, translated and published a lot of Western books introducing Western learning to successfully accomplish their missionary work. In the process, many new words and translated terms were created. But, as the Qing Dynasty strictly prohibited the missionary work in the 18th Century, the introduction of the Western learning was suspended as well as the missionary work.

At the beginning of the 19th Century, the Protestant missionaries who arrived in the southeastern coast of China resumed the missionary work, and the second phase of the introduction of the Western learning started too. Protestant missionaries had a lot in common in missionary policies and other aspects with the missionaries of the Society of Jesus. But did they succeed the cultural assets of the Society of Jesus including their new words and translated terms? If so, how did they succeed the knowledge? How did it influence on the introduction of the Western learning?

In this paper, by investigating how the Protestant missionaries succeeded the words *NETTAI*, *ONTAI*, and *KANTAI* translated by the members of the Society of Jesus, the process of linguistic contacts and spread of knowledge and vocabulary induced by the

cultural exchange is discussed. In this paper, it is verified that some words used in translation were not succeeded in a straight manner, but after many twists and turns. It is also emphasized that the Chinese intellectuals played important roles in the process. Voluntary and active efforts are indispensable in accepting any cultures.

十六世紀来華したカトリック宣教師（主にイエズス会士）による布教、西洋の科学知識の紹介は、「西学東漸」の第一波とすれば、十九世紀の初頭、清王朝の禁教政策による百年以上の隔たりを経て、中国の東南沿海部にやってきたプロテスタント宣教師は、西学東漸の第二波を引き起こしたということになる。

布教方針など、多くの点において、イエズス会宣教師のそれを踏襲したプロテスタント宣教師たちは、先輩が残してくれた文化遺産に対して、どのような態度を取ったのか。宗派のハードルは越えたいものがあるにせよ、科学知識の部分に関しては、例えば翻訳書に用いられている訳語、術語は、継承されたのか、継承されたとすれば如何に継承したのかなどの問題がある。

訳語の継承は、知識の伝播ルートなどを反映するものであり、それを跡づけることは、外来文化の導入、伝播、普及の史実を解明することに繋がる。例えば「望遠鏡」は、明末、telescopeの伝来に伴って、発生した新語であって、成立した後、日本にも伝わった。改暦に大いに活用された望遠鏡は、清には入ってからも天文観察を司る欽天監では使い続けられていたが、洋学導入の停止によって一般社会との関わりが非常に小さくなった。従って清初まで一般文化人が使っていた「望遠鏡」という語も清末になって当時の文献から姿を消した。現代中国語の「望遠鏡」は明代語彙の継承ではなく、日本から逆輸入されたものである。¹⁾「望遠鏡」に似た例に「細胞」がある。「細胞」という文字列は早くも宇田川榕菴の『植学啓原』（1834）に見えるが、現代日本語の「細胞」は榕菴ではなく、李善蘭訳の『植物学』²⁾（1858）に由来している。僅か数十年の間でも訳語に断絶が生じたのだから、百年以上の時空の隔たりやカトリック・プロテスタントの宗派の違いを越えて、訳語の伝承があったかどうかは、近代における東西の言語・文化の交流を考える上で非常に興味深い問題である。

本稿は、「熱帯、温帯、寒帯」という地理学の五帯名称について、訳語の継承という観点からいままでになされた結論を吟味し、再考するものである。

一 前期洋学書訳語の行方

イエズス会士たちは、豊富な著述を残した。ここではイエズス会士の著述を前期洋学書と

呼ぶ。³⁾ その詳細に関しては、徐宗沢などに詳しい。⁴⁾ 内容別に見れば、宗教関係の書物が最も多く、天文・地理、数学、医学、論理学などの分野にも及んでいる。⁵⁾ その後、清王朝の禁教政策により、宣教師が国外退去処分を受け、執筆活動も、十八世紀前半で基本的に終了した。イエズス会士らの著述は、李之藻によって『天学初函』に収録され、当時から士大夫、信者を中心に広く読まれた。清に入ってから天文・地理、数学などの科学関係のものは『四庫全書』に収められ、伝統的な学問体系に組み込まれていった。『四庫全書』に収録されているイエズス会士らの著述はかなりの数に達している。⁶⁾ しかし禁教政策、および中国の伝統社会の学問への指向性に影響され、アヘン戦争後の上海墨海書館の訳書運動まで、イエズス会士らの著述はほとんど省みることがなかった。アヘン戦争の敗北によって、中国の知識人の間に「開眼看世界」の機運が高まって、イエズス会士らの地理書は、図らずも世界を知る格好な情報源となった。一方、上海では例えば、科挙の道を放棄し、数学を深く探究することを人生の目標にした李善蘭は、ワイリー（偉烈亜力）と共同で『幾何原本』巻6以下を訳出したとき、その訳語は当然のことながらマテオ・リッチ、徐光啓共訳の巻1～巻6の用語を継承した。李善蘭・エドキンズ（艾約瑟）が共同で『重学』を翻訳したとき、ワイリーが『重学浅説』を翻訳したときも、王微の『奇器図説』（1627）が参考書になっていることは訳語の近似性を見ても明らかである。⁷⁾ しかし、プロテスタント宣教師の著述に用いられている地名、地理学に関する術語等からも分かるように、イエズス会士らがある意味で最も力を入れ、中国人の世界観、世界認識まで変えた天文・地理の書については、プロテスタント宣教師たちは何故か目を向けなかった。しかし一つの例外として、ロンドン伝道会宣教師、レッグ（理雅各）が自ら編訳した英語の教科書、『智環啓蒙塾課初歩』（1856、以下『智環啓蒙』と略す）の中で「熱帯、温帯、寒帯」というイエズス会士が創造したのと同じ五帯名称を後期洋学書において初めて使用したことである。レッグはイエズス会士らの訳語を取り入れたように見えるが、事実はどうであっただろうか。

二 荒川清秀の貢献と問題点

荒川清秀はその著『近代日中学術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に——』において、「熱帯」等の五帯名称の訳語について、詳細な考察を行った。⁸⁾ 氏の結論は、以下のように整理することができる。

- (一) マテオ・リッチ（利瑪竇）がその世界地図において、はじめて中国の読者に五帯の知識を紹介した。しかし、かれは訳語を完成せず、説明式のフレーズを用いていた：「甚熱、帯……，正帯，甚冷，帯……」。
- (二) アレニ（艾儒略）はその地理書『職方外紀』（1623）で、マテオ・リッチのフレーズを熟

語に仕上げて、訳語「熱帯、温帯、冷帯」を完成した。

- (三) レッグの『智環啓蒙』(1856)までに、後期洋学書、即ち十九世紀の漢訳洋書においてイエズス会士の「熱帯」系の訳語が用いられなかった。
- (四) レッグの『智環啓蒙』はイエズス会士の訳語「熱帯、温帯、寒帯」を継承し、用いた最初の後期漢訳洋書である。
- (五) レッグの『智環啓蒙』以降、「熱帯」系の五帯名称は上海の墨海書館の訳書に採用されて、一般化し、中国、日本の共通した訳語になって、今日に至る。

荒川の研究は開拓的なものであり、語構成という訳語創造の次元で、「熱帯」が日本製訳語ではなく、中国製の訳語であることを立証した。荒川の研究は、単なる個別の訳語の語源を明らかにしただけではなく、洋学の流入と新語・訳語の創造、及びその伝播、普及の全過程をも射程に入れ、幾つかの重要な問題を解決した。但し、荒川は、「熱帯」の語源追究に成功したが、以下の問題に関しては必ずしも満足のいく結論に至っていないと思われる。

つまり、荒川は、レッグは直接あるいは間接的にイエズス会士らの著述から「熱帯」系の五帯名称を取り入れたと考えているのだが、⁹⁾レッグはどのように前期洋学書の内容を知ったのか、何故レッグだけ前期洋学書から知識を吸収できたのか、またレッグの訳語は、マテオ・リッチともアレニの『職方外紀』とも完全に一致していない事実はどのように説明すべきか(上記一、二、と四を比較すること)、レッグは複数の文献から訳語を取り入れたのか、それとも一つの文献の訳語に修正を加えたのか、何故そのような修正を加えなければならなかったか、などの点である。

三 レッグまでの地理書と五帯知識

ここではまずレッグまでの十九世紀の漢訳洋学書における五帯知識とその訳語について整理しておくことにしよう。

衆知の通り、モリソンらプロテスタント宣教師は、世界の歴史、地理及びその他西洋に関する知識の紹介を熱心に行い、数種類の西洋の歴史、世界地理に関する小冊子を出版した。例えば『古時如氏国歴代略伝』(モリソン 1814)、『西遊地球聞見略伝』(モリソン 1819)、『地理便童略伝』(メドハースト 1819)、『大英国統志』(ギュツラフ 1834)、『古今万国網鑑』(ギュツラフ 1838)、¹⁰⁾『万国地理全集』(ギュツラフ 1838)などである。同時に、彼らは自ら編さんした雑誌にも、世界の歴史、地理、及び天文学の記事を掲載した。宣教師によるこれらの書物の中で、五帯に関する知識は、どのように紹介されていたのであろうか。

十九世紀初頭から、アヘン戦争までの文献の中で、最初に五帯知識に触れたのは、ミルン(米

憐)がマラッカで出版した雑誌『察世俗毎月統記伝』(1815-1822)であった。本誌第六巻から連載された記事「全地万国紀略」の中で、アフリカの地形について、次のように述べている¹¹⁾。

亞非利加地有一半在中帶之北，又有一半在中帶之南，又其地十分中有八九分在北帶南帶之間，所以其氣甚熱。〈論亞非利加列國〉嘉慶庚辰年(1820)全卷五十六葉上

ミルンは、「中帶」という語で赤道を指し、「北帶、南帶」でそれぞれ南北回帰線を指していた。「中帶」はすでにイエズス会士の著作の中に見える。例えば、フェルビースト(南懷仁)は、『坤輿図説』の中で「中帶」という語を熱帯の意味に用いている。しかし、ミルンの「中帶」は、フェルビーストとは無関係であって、むしろ equator の直訳と考えられる¹²⁾。

ミルンの後に再び五帯について言及したのはギュツラフ(郭実臘)である。かれは、『東西洋考毎月統記伝』(1833-1838)において、次のように二篇の記事の中で五帯について紹介している¹³⁾。

(一) 觀地球面上考各地之内。惟是近中帶者甚為溫熱。離中帶偏南北兩邊。皆有夏冬之別。致覺熱寒不等。且又遠離中帶兩邊更加寒凍之極。則常有永不消之冰雪也。(〈新考出在南方大洲〉, 1833年8月29頁)

(二) 天之正中一圈為赤道，地之正中一圈躋赤道均分之，兩半球每分九十度有帶南北各離二十三度半為順眼見太陽所到之限，人稱之暑氣，南北各有四十三度三分之際，有兩中和之氣候，此外南北極之際，二十三度二分，有寒氣候。從中線往上數至北極，為北方，從中線往下數至南極，為南方。(〈地理，地球全圖之總論〉, 1834年2月90頁)

例一の「中帶」は、熱帯とも理解することができるが、ミルンとの繋がりを考えればやはり赤道であろう。例二では、ギュツラフは、天の中央の圏を「赤道」という中国伝統的な名前と呼び、赤道に呼応している地の中央の圏を「中線」と呼んでいた。また“兩半球每分九十度有帶南北各離二十三度半為順眼見太陽所到之限”とある文章の表現からも分かるように、ここの「帶」は、ミルンと同じく南北回帰線を指している。つまり「帶」はラインということになる。ギュツラフは、「暑氣」「中和之氣候」「寒氣候」などの表現で、それぞれ熱帯、温帯、寒帯を、或いは、厳格的に言えば、それぞれの地帯の氣候を指していた。

ミルンとギュツラフは、地理学者ではなく、地理に関する知識も、彼らの先輩マテオ・リッチ、アレニに及ばず、彼らによる書物の内容も、イエズス会士らの著作の内容水準に達していない。地表の区分やそれぞれの気候的特徴に言及したものの、五帯を明確に定義せず、訳語も用意していなかった。また国名、地名などの固有名詞を含め、ほかに用いられている術語もイエズス会士から継承したものではなく、かれらが独自に創作したものと思われる。

アヘン戦争後、世界情勢を知りたいという中国士大夫層の要望に応えるべく、数種類の地理

学書が出版された。マークス（瑪吉士）の『新釈地理備考』（1847、以下『地理備考』と略す）、ミュアヘッド（慕維廉）の『地理全志』（1853～1854）、ウェー（禔理哲）の『地球図説』（1848）と『地球説略』（1856）である。中では、マークスの『地理備考』は最も重要な書物であった。本書は、内容と術語の両面において、その後の著作にきわめて大きな影響を与えた。『地理備考』及びその著者、マークスについてはまだ不明な点が多いが、現在、次のことが判明されている。マークス（Jose Martins-Marquez）は、マカオ生まれのポルトガル人で、幼小時から聖約書院で学び、公神父に従師した。後にマカオ当局の通訳となり、1847～1866年の間、フランス在中国公使館の通訳を務めた¹⁴⁾。『地理備考』は、単行本が見つからないことから、『海山仙館叢書』の編者の依頼で執筆したものと推測される。執筆にあたって、マークスは当時の西洋の地理学の著書を参考にしたことが明らかで、本書は、19世紀前半の西洋の地理学研究の成果を反映している。

マークスは、『地理備考』巻一「寒温熱道論」の中で、次のように述べている。

察地理者、又觀其四小圈必橫分地球為五段、而各段中之處、或在南、或在北、或在中、勢必有寒温熱三者之別、各自不同故以每段而名之曰道、其一乃熱道也、在南北二帶之間者寬四十六度五十六分、(中略)其二乃温道也、有二道焉、一在北帶北極圈線之間者、一在南帶南極圈線之間者、每寬四十三度四分、(中略)其三乃寒道也、亦有二道焉、一在北極圈線之内者、一在南極圈線之内者、每寬二十三度二十三分、(96頁、句点は筆者)

つまり、地球は、四つの小さい圈（南北二帯=南北回歸線、南北極圈線=南北極圈）によって、五つの地域に分割され、マークスは、それぞれ、「熱道、温道、寒道」と命名（名之曰）したのである。「南帯、北帯」はミルンの『全地万国紀略』の中に見つけることができ、「熱道」等の訳語もマークスの考案によるものではない。ウィリアムス（衛三畏）の『英華韻府歴階』（1844）ではすでに見出し語 ZONE の項目下に、

Zone, torrid 熱道 ; temperate 温道 ; frigid 寒道

と見える¹⁵⁾。これらの訳語は、ウィリアムスの創造によるものかどうかは不明だが、モリソンの字典に負うところが大きいことは間違いない（後述）。

『地理備考』に用いられているその他の訳語、術語に関しては、イエズス会士の地理学の著作を参照した痕跡がなく、ほとんどマークスが独自に考案したと思われる¹⁶⁾。

『地理備考』が出版されてすぐ各方面の注目を集めた。魏源は、『海国図志』百巻本（1852）において、本書を十二万字引用した¹⁷⁾。引用部分に、いうまでもなく五帯に関する記述がある。

一方、ミュアヘッドは、その地理学の新著『地理全志』の序で、次のように述べている。

究地理者、近著二書、一名新釋地理備攷、海山仙館西洋士瑪吉所輯、一名瀛環志略、五臺

徐繼畬所輯，詳明博證，言地理者，得所指歸，輯是書者，多本其意，以發明之耳。

このように、『地理全志』は、体裁上、そして術語の面でも、『地理備考』に従うところが多い。例えば『地理全志』の下篇卷九の「地文総論」章に、

大小圓線，共有十類，大者有六，名曰赤道，地平，午線，黃道，春秋二分，冬夏二至，小者有四，名曰南帶，北帶，南寒線，北寒線

と見える。幾つかのタームに変動——たとえば「南北極圓線」が「南北寒線」に改められた——があったが、地域区画やそれを表現する用語も、概ねマーケスに準じている。『地理全志』では、直接五帯を論じる部分がなく、ただ南北回歸線，南北極圈を紹介するとき、次のように述べているだけである。

（南帶北帶）二帶者，与赤道相平，各離赤道二十三度二十八分，在氣候為熱道之界，北曰北帶，南曰南帶，寒道二線，与二帶相平，各離其帶四十三度四分，在氣候為二溫道之界，南曰南寒線，北曰北寒線，再各二十三度二十八分，在氣候為二寒道之界，即南北二極，〈下編卷九，地球圖線論〉

『地理全志』が出版された前後，ウェーが『地理図説』（1848）を，ホブソンが『博物新編』（1855）を出版した。これらの著作においても、「熱道」系の訳語が使用されている。このように，ミュアヘッドの地理書までイエズス会士らの「熱帯」系の訳語ではなく，マーケスの「熱道」系の訳語が使用されていたことが分かる。

しかしながら，イエズス会士らの著述は，忘れ去られたわけではない。特に『四庫全書』——ある意味では伝統的な学問体系の中に組み入れられた——に収録された前期漢訳洋書の中の地理書は，二百年の歳月が過ぎた後も，世界情勢を知ろうとする中国士大夫の主な情報源であった。「西洋人譚西洋」と自負する『海国図志』は，イエズス会士らの地理学に関する著述を詳細に引用している。そのうち，五帯知識に関しては，以下の部分がある。

卷七十五，マテオ・リッチ《萬國地圖》： 五帶；熱，帶；冷，帶；正帶

卷七十五，アレニー《職方外紀》： 五帶；熱帶；温帶；冷帶

卷七十六，フェルビースト《坤輿圖説》： 五帶；中帶；冷，帶；正帶

特に引用するだけでなく，案語や説明の部分（つまり地の文）でも，魏源は例えば下例のように，アレニと同じ五帯名称を使用していることは注目に値する。

（一）案：兩極下皆太陽行度所不到，皆冷帶也。距熱帶，温帶甚遠。是冰阻無人物之說甚確，而南極下温暖之說全無此理。卷七十，外大西洋（1810¹⁸⁾頁）

（二）惟印度正當熱帶，地過炎輿，人多裸袒。而震旦則正當温帶，四序和平。（中略）西洋温帶之地，則為地中海所佔；而歐羅巴亦偏于冷帶，利未亞亦偏于熱帶。卷七十四，國地總

論上 (1850 頁)

(三) 其海跨越赤道南北週八萬餘里，且多在溫帶寒暑均平之區，尚勝地球北極下冷帶有人之地，豈冷帶有人而溫帶反無人乎？赤道以南，空地亦週七萬餘里，其地在南極冷帶者半，在溫帶者亦半，溫帶以下，亦必有國土居民。卷七十四，國地總論上 (1852 頁)

ここから分かるように、魏源はすでに正確に五帯知識を理解している。『海国図志』50 巻本、60 巻本に用いられているのは、前期漢訳洋書の「熱帯」系だけであつたが、百巻本には、マーケスの「熱道」系訳語も登場している¹⁹⁾。しかし使用回数、魏源自身の使用情況から見れば、『海国図志』において、「熱帯、温帯、冷帯」は、優勢を占める訳語と言える。

上述したように、イエズス会士の文化的遺産は、プロテスタント宣教師ではなく、魏源ら中国の士大夫に受け継がれたことが分かる。ところでイエズス会士らが創造し、魏源によって『海国図志』にも使用されている「熱帯」系の訳語は、レッグの「熱帯」との間にどのような関係があつただろうか。

四 知識の伝播——そのルートについて

マーケスの宗教的背景が明らかになっていないが、その他のプロテスタントの宣教師について言えば、彼らは、渡来当初イエズス会士らの活動と著述について必ずしも十分な知識を持っていなかった。例えばモリソンの一連の著作やギュツラフの雑誌『東西洋考毎月統紀傳』(1833~1838)の中で、イエズス会士に関する内容がなく、広州で布教活動に従事するブリッジマン(裨治文)の著作、『美理哥合省国志略』(1838)、*Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*, 1841の中でも、イエズス会士の天文学、地理学の関係書物の利用が見あたらない。その原因は、宗派の違い、中国語の読解力にあるのではないかと思われる。

しかし1840年代以降、変化が生じた。中国の士大夫を通じて、地理学等に関するイエズス会士らの著述の存在は、上海で布教活動をしているロンドン会の宣教師を中心に広く知られるようになる。

その最初の事例は、上海で出版された英字新聞ノース・チャイナ・ヘラルド (*North China Herald*)に見られる。本紙は、1852年10月から4回 (No. 115-118) にわたって ON THE INTRODUCTION OF EUROPEAN ASTRONOMY BY THE JESUITS, AT PEKING (北京のイエズス会士らによるヨーロッパ天文学の紹介) という文章を連載した。このイエズス会士らが中国の天文学への貢献を紹介する文章の中で、以下の人物と著作が列挙されている²⁰⁾。

利瑪竇『乾坤體説(義)』*『測量法義』*『測量異同』*『勾股義』*、龐迪我、龍華民、艾儒略『職方外紀』*、陽瑪諾『天文(問)略』*、熊三拔『表図(度)説』*、鄧玉函『奇器図

説】*、羅雅谷、湯若望、南懷仁、戴進賢、徐懋德、蔣友仁『地球図説』

しかしこの時点に記事の執筆者は、実際これらの書物を見たかどうかは少し疑問に思うところもある。というのは、書名を三つも間違えたのである。発音の近い字が間違っていて用いられているところから見れば、中国の知識人からイエズス会士の著述に関する情報を口頭で受けた可能性が大であろう。

荒川は、『海国図志』或いは英字新聞ノース・チャイナ・ヘラルドは、レッグのイエズス会士に関する情報源になった可能性があると指摘している²¹⁾。それでは、具体的に『海国図志』か、それともノース・チャイナ・ヘラルドか。

レッグの「熱帯」は、一見して、『海国図志』を同じ系列になるが、しかし、レッグが『海国図志』を読んだ痕跡は、少なくとも、地名、外国名から見つからない²²⁾。たとえば、読んだとしても、『海国図志』は、レッグの訳語の直接の出所にはなりえない。というのは、『海国図志』では、「冷帯」だけが用いられ、「寒帯」が用いられていなかったからである²³⁾。

一方、ノース・チャイナ・ヘラルド紙のルートは如何だろうか。前述した記事のタイトルは“天文学に関する貢献”ではあるが、地理学、測量、機械等の学科の内容も含まれているので、記事にある図書リストを手がかりに、イエズス会士らの著述を知り、閲覧、参照することは可能となる。しかしレッグは、果たして参照しただろうか。二つの事実がその可能性を否定している。

一つは、すでに述べたように『乾坤体義』の中で「熱帯、正帯、寒帯」が用いられ、『職方外紀』の中で「熱帯、温帯、冷帯」が用いられている。しかし、レッグは、両書のどちらとも異なる「熱帯、温帯、寒帯」というセットを用いている。レッグの訳語は、前期洋学書から来たという判断は、氏は『乾坤体義』と『職方外紀』の訳語に対して、取舍撰択を行ったことが前提にしなければならない。レッグは本当にこのような取舍撰択を行ったのか？行ったとすれば、その基準は何か。

第二に、ノース・チャイナ・ヘラルドの文章の中で、mechanicsの書籍として、『奇器図説』についても紹介されている。レッグは『智環啓蒙』を編訳したとき、有用な知識として、ぜひ力学の内容を中国の読者に紹介したかったことは、文明と半開の違いは、有用な知識の有無にあるという考え方（『智環啓蒙』第156課）を見ても明らかである。したがって、もし可能であれば、『奇器図説』を読まないでおくことはないであろう。『奇器図説』は『四庫全書』に収められており、稀観書ではない。レッグは『奇器図説』を見つけることが可能であろう。しかし力学に関する『奇器図説』と『智環啓蒙』の用語を比較することによって、レッグは『奇器図説』を読んでいないことが明らかである²⁴⁾。

このように『海国図志』とノース・チャイナ・ヘラルドのどちらもレッグに訳語を提供する直接の供給源とは断定しにくい。

五 より精確な訳語を求めて

以上の考察を通じて、われわれは、十九世紀五十年代までの状況を大体把握することができた。すなわち、五帯名称について、ミルン、ギュツラフの雑誌においてまだ訳語が用意されていなかったが、ウィリアムスの辞書に「熱道、温道、寒道」が登場し、マーケス、ミュアヘッドらによって地理学の書に使用されている。一方、魏源がイエズス会士らの著述から「熱帯」系の訳語を取り入れた。二つの系列の訳語の違いは「道」「帯」にあるが、漢字語素としての「道」「帯」がどのように違うのだろうか、そして宣教師たちはどのようにその違いを捉えたのだろうか。

『辞源』等の中国語辞書によれば、

- 「道」：道路；方法；規律，事理，思想，学説；古代行政区画名（漢代は少数民族居住地に，唐代は全国を十道に分ける，清代は省と州，府の間に道を設ける）
- 「帯」：衣服の帯，带状のもの。

「道」は古代から行政区画名として用いられていたが、「道」を含む複合語に地域を指すものがなく、多くは道路の意味を表すものである（道路，街道）。それに対して「帯」は、「一帯，地帯」のように地域を指す複合語に用いられている。地理的区域を指す場合、「道」は「帯」より狭い地域を指すのが普通である。

イエズス会士らは equator を赤道と訳すのは、中国の伝統的な天文学の発想に配慮するもので、²⁵⁾ 原語は「地球を南北に二分するもの」が原義で、線としてのイメージが強いであろう。実際にも「昼夜平分線」と訳されていることもある。南北回帰線や南北極圏の境界も「線」と訳出されている。このような線に挟まれている带状の地域に対して、「～帯」と命名し、「熱帯、温帯、冷帯、寒帯」といった一連の訳語が誕生したのである。

しかし十九世紀初頭のプロテスタント宣教師らは、「帯」に対するこのような理解を継承しなかった。前述したように、ミルンは赤道を「中帯」と呼び、南北回帰線を「南帯、北帯」と呼んでいた。ミルンの使い方はまた次のようにモリソンの *English and Chinese Dictionary*, 1822 に反映されている。

EQUATOR, 赤道；中帯。

TROPIC of Cancer, 北帯；of Capricorn, 南帯：in place of the word tae, 道 daou is also used。

ZONE, a girdle, 帯子；圍帶。

「道」は「帯」の同義語として捉えられていることも注目に値する。

マーケスも「熱道」系の訳語を採用したことは前述した通りであるが、「道」と「帯」の同一視は氏の『地理備考』に術語の面で大きな混乱をもたらしたようである。例えば『地理備考』では「圓線論」章の「地球圓線論」「寒温熱道論」「地球時刻道論」などの節において、地球表面を区画する境界線や区画された地域を表すのに以下の術語が用いられている。

天軸大圈、赤道、晝夜平線、北帯（北回歸線）、南帯（南回歸線）、黃道中線、圓線、熱道、温道、寒道、北極圓線、南極圓線、春秋分線、夏冬至線、午線、天邊圈、時刻道、第一道、第二道……

上記の術語から分かるように同じくライン（境界線）を指すのに“圈、道、線、帯”が用いられている一方、地域を表すのに「道」を含む複合語も用いられている。特に「時刻道」の概念は、この用字の混乱に拍車をかけている。マーケスは

古之察地理者、除以地球分為五道（中略）外、又以六十道分之、而寬狹不一、南北二方各三十段、名之曰時刻道、（中略）後世之察地理者、未嘗多用其法以指示各處所在、今因此法可以指明各地晝夜長短之別、實有補助故仍論之、（112頁）

と述べている。ここの「時刻道」は climate と考えられ、現在では「気候、あるいは（ある特定の気候の）土地、地方」と訳されており（ギリシャ語「傾斜、（緯度でみた時の）地域」が語源義）、zone より小さい地域を指している。しかし『地理備考』では「熱道、温道、寒道」「時刻道」のように地域の広さが異なるにも関わらず、同じ造語成分「道」が用いられている。

ミュアヘッドは『地理全志』の中で「時刻道」を「暑寒道」に改めて次のように述べている。

以地面諸處、較于太陽、分地球為細道、名曰暑寒道、与赤道相平、皆以天文方位、分別氣候、以晝之至長論之、（卷 916 頁裏）

しかし改訂によって熱道、温道、寒道の中にさらに「暑寒道」という「細道」が含まれることになり、術語の混乱が増幅されたと言わざるを得ない。

『智環啓蒙』において同じく climate の概念を紹介しようとしたレッグは、用語の混乱に気づき、それを整理しようとするのは至極当然のことである。レッグは climate を五帯の中の特定の気候を有する地域として「寒暑道」と訳し、五帯の名称を「熱帯、温帯、寒帯」に定めたのである。これはつまりレッグは「道」を「帯」より狭い地域を表す字として理解することを意味する。「第 123 課熱帯論」に「于地球形象、以潤帶一條、自東而西、包裹其中、致蓋球面三分之一、斯可比擬熱帶。」と訳している。ここに「熱道」系が「熱帯」系に変わった言語上の理由が潜められていると筆者が考えている。

ただし、筆者は同時にレッグがマーケスの「熱道、温道、寒道」を「熱帯、温帯、寒帯」に改造した（つまり「道」を「帯」に変えた）というより、後述するように『遐邇貫珍』の「熱道帯、温道帯、寒道帯」から「道」を削除し、「熱帯、温帯、寒帯」という訳語を得たと考えている。訳語創作の点からすれば、後者はより簡単であろう。

六 『遐邇貫珍』と訳語の伝承

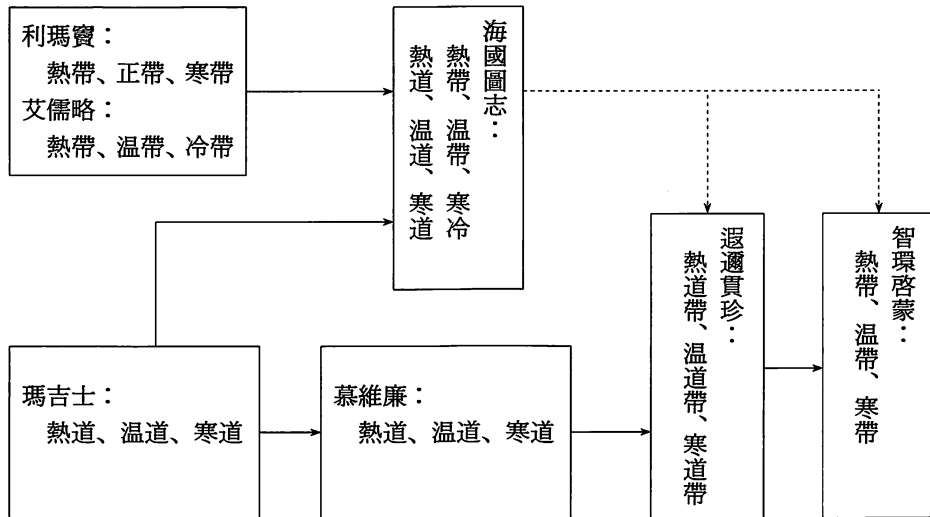
アヘン戦争以降、ロンドン伝道会は中国での布教拠点を上海に移した。中国南部で活動を続けた同会のベテラン宣教師がレッグ一人になった。しかしレッグは、上海の宣教師たちと密接な関係を保っていた。香港にいたレッグと上海の宣教師たちとの訳語の交流について、荒川は、レッグが帰英中、墨海書館の印刷責任者として見込んで「上海につれてきたのがワイリーであった。したがって、両者の間に訳語の継承関係があるのは不思議ではない」と指摘している²⁶⁾。筆者は雑誌『遐邇貫珍』（1853～1856）は両地の宣教師の知識共有に大きな役割を果たし、訳語の交流も本誌を通じて行われたと考えている。周知のように『遐邇貫珍』は香港モリソン教育会が出資し、ロンドン会上海支部の責任者、メドハーストが編集長を務め、英華書院が印刷発行した中国語の雑誌である（中国本土の中国語雑誌は本誌が最初）。それまでの中国語雑誌『東西洋考毎月統記伝』等に比べれば、『遐邇貫珍』の文章はそれまでの雑誌の口語体と違って、洗練された文語体に仕上げられている。印刷・出版地は香港だが、記事の一部は上海で用意されたものと考えられる。内容的にも、『遐邇貫珍』では布教の文章が影を潜め、ニュース記事や格致（科学）関係のものが中心となった。

レッグは1855年C. B. Hillier（奚禮爾）の後を継ぎ、『遐邇貫珍』の編集長になり、そして一年後、自らの手で同誌を廃刊にした。レッグは、『遐邇貫珍』から各種な情報、知識を得たことについて筆者は、すでに拙論において指摘している²⁷⁾。五帯名称について特に注目したいのは、『遐邇貫珍』1855年第6号（6月）、第7号（7月）、第9号（9月）に連載された「地理撮要」という文章である。執筆者の署名がないが、“甲寅歲，上海有大英慕維廉先生，著有地理全志，分為文，質，政，三統，斯誠無微不搜，無義不窮者矣”という表現からミュアヘッドの近くにいる人が関係したと推測される²⁸⁾。この文章は大きい字体のキーセンテンスと小さい字体による詳細な説明からなっている。全部で24頁（12丁）の短い文章だが、地理学が扱う範囲や基本的な概念について説明している。第一部の「数」（Mathematical Geography）の中で五帯について次のように述べている。

此四線之隙，在地球分為五道帶，一曰熱道帶，二三曰温道帶，四五曰寒道帶。熱道帶，所蓋之處，在夏冬二至緯線之間，（中略）寒道帶，分南北，在南北二極圓線之外，（中略）温道

帯，亦分南北，于二極二至圖線之間

すでに述べたようにそれまでの後期洋学書では「熱道」系の名称しか使用されていなかった。この「道」と「帯」の融合した形を取る「熱道帯」系の名称は如何にして発生したのだろうか。ミュアヘッドは、マーケスの用語を取り入れて、『地理全志』の中で、the equator, the torrid zone (the tropics), climate の訳語としてそれぞれ「赤道」「熱道」「寒暑道」を使用していた。「地理撮要」の執筆者は、この「～道」による混乱を解消するために「熱道帯」以下の語を考案したと推測される。聖書の訳語で激しい論争を展開した宣教師たちの間では訳語の問題に対してより敏感になり、適切さ、厳密さが求められるようになった結果と思われる。『地理全志』の巻一に僅か八行だが、「地理名解」の章があった。ミュアヘッドは地理学の術語を整理しようとする意思が伺える。「地理撮要」では用語説明の内容は文章全体の半分を超え、術語選定の傾向がいつそう鮮明になったと言えよう。「熱道帯」などの用語はこのような背景のもとで考案されたものと筆者は考えている。『智環啓蒙』の執筆にあたってレッグが「地理撮要」を参照したことは、両書とも「亜麦裏加」という他の本に見えない独特の音訳語を用いていることを見ても明らかである。但しレッグは『遐邇貫珍』の「熱道帯」をさらに「熱帯」と改めたのである。その後「熱帯」系の名称は、上海墨海書館の雑誌『六合叢談』や他の訳書に取り入れられ、広がった。このようにマーケス、ミュアヘッドの「熱道」系訳語→『遐邇貫珍』の「熱道帯」→レッグの「熱帯」→『六合叢談』→一般化（日本の伝来を含む）というプロセスを辿って成立したのである。レッグはこの過程において前を受け、後に伝える重要な役割を果たしたと評価



(虚線は不確定な影響を表す)

すべきである。前・後期漢訳洋書の間における五帯名称の成立は、下図のように示すことができる。

七 終わりに

以上の考察を通じて、「熱帯」等の五帯名称は紆余曲折を経て、最終的にイエズス会士らの訳語と同じ形にはなったのだが、直截な関係がないという結論に至った。イエズス会士らの著述を含め、中国の地理学の文化遺産はなぜ迅速に受け継がれなかったのか。

モリソンが中国滞在三十年を超す。彼の七人の中国語教師は、一名の年を老いた秀才を除けば、みな下層の民衆であった³⁰⁾。これはモリソンの中国古典に対する涉獵と研鑽に少なからぬ悪影響を与えたであろう。それに対して、上海のロンドン会の宣教師たちは、中国一流の文化人、王韜、李善蘭らに出会い、彼らの助力を得ることができた。『幾何原本』の続訳はその象徴的な事件であろう。しかし中国の文化人が果たせた役割が、彼らの教養、興味によって大きく制限された。数学、力学（李善蘭の得意分野）と比べた場合、地理学に関するイエズス会士らの遺産の継承は非常に不十分と言わざるを得ない。現に、中国語の地理・地質用語が二十世紀初頭、日本語から体系的に借用したことによってようやく整備・確立した事実が存在している。

近代日中間における洋学導入のプロセスを観察するとき、顕著な違いが存在することに気づく。蘭学は日本人が中心に進められた外来文化の摂取であったのに対して、中国では明末・清初の一時期に士大夫層が大きな役割を果たしたが、一世紀以上の禁教を経た清末では、洋学の紹介、導入の主役を務めたのが、宣教師たちであった。王韜らの中国の文化人が「傭書」という補佐的な地位に甘んじるしかなかった。外来の文化・文明を受容するにあたって、受容側の人（ネーティブ）の積極的な参与がなければ成功し得ないことを歴史がわれわれに教えてくれた。これが地理学の訳語の継承を通じて得た教訓であろう。

注

- 1) 谷口知子「日中ことばの交流——「望遠鏡」を中心として」『中国語学』248号2001年307～323頁。
- 2) 但し李善蘭が考案した「細胞」はそのまま中国語に定着せず、現代中国語の「細胞」は、日清戦争後、日本語から逆輸入されたものである。沈国威『植学啓原と植物学の語彙——近代日中植物学用語の形成と交流』関西大学出版部2000年68～78頁を参照。
- 3) 佐藤亨『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社1986年17～19頁、荒川清秀『近代日中學術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に』白帝社1998年23～26頁、沈国威「新漢語に関する思考」『文林』（神戸松蔭女子大）第32号1998年37～61頁を参照。
- 4) 徐宗沢『明清間耶穌会士訳書提要』中華書局1940
- 5) 科学分野別の洋学の伝らについて、方豪『中西交通史』台北、中国文化大学出版社1983を参照。

- 6) 『四庫全書』經部地理類に『職方外紀』, 子部農家類に『泰西水法』, 天文算法類に『乾坤體義』『表度説』『簡平儀説』『天問略』『幾何原本』, 譜録類に『奇器図説』が収録されている。また実際に西洋人の著述だが, 中国人の名前で収録されているものも多数ある。
- 7) 沈国威『智環啓蒙塾課初歩』(1856)における前期洋学書訳語の継承と発展『関西大学東西学術研究所創立50周年記念論文集』関西大学出版部2001年151~166頁を参照。
- 8) 『近代日中学術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に——』白帝社1997年38~60頁。
- 9) 荒川前掲書55頁。
- 10) 蘇精『馬禮遜與中文出版印刷』台湾学生書局2000年35~53頁を参照。
- 11) 本書は, 1822年英華書院より単行本が出版された。
- 12) 命名の発想も異なる。フェルビーストの「中帯」は地帯で, ミルンの「中帯」は, 中央のラインである。
- 13) 黄時鑑整理『東西洋行毎月統記伝』中華書局1997復刻版
- 14) 『近代來華外國人名辞典』(中国社会科学出版社1981年314頁)を参照。なお, 公神父(Goncalves, Joachim Alphonse)は, ポルトガル遣使會の宣教師, 一八一三年マカオに渡来し, 布教する傍ら聖約瑟書院で教鞭を執っていた。官話と廣州方言に造詣が深く, Diccionario China-Portuquez (1833), Vocabularium Latino-Sinicum (1836)など数種類の辞書を編纂していた。(同人名辞典172頁)
- 15) 中国語の発音を省略している。同辞書の見出し語 Torrid, Temperate, Frigid の下に地理学の訳語がない。
- 16) 例えば音訳の地名, 国名に例外なく口偏を付けていた。
- 17) 『海国図志』50巻本(1844), 60巻本(1847)には引用することができない, なお, 『地理備考』は計20万字と推定される。
- 18) 『海国図志』岳麓書社1998点校版
- 19) 『海国図志』巻59。
- 20) 無署名記事なので執筆者は不明。ただし本記事の直前, 同紙に掲載された中国の数学に関する記事がワイリーの手によるものであることを考えれば, この記事も同氏によるものと思われる。括弧の中は正しい書名。アスタリスク付の書は『四庫全書』に収録。なお『測量法義』以下三書は『四庫全書』では徐光啓撰とされる。
- 21) 荒川前掲書54頁。
- 22) ミュアヘッドやマーティン(丁健良)も自著の序文で『瀛寰誌略』を参考書に取り上げるが, 『海国図志』に言及していない。未見か。
- 23) レッグまでに「熱帯, 温帯, 寒帯」というセットで五帯名詞を用いた洋学書は, アレニの『西方答問』(1637, 『職方外紀』を要約した上下二巻五〇葉たらずの小冊子)だけであった。この書は一般に知られず, レッグが読んだ形跡もない。内田慶市氏のご教示による。
- 24) 沈前掲論文を参照。
- 25) ここの「道」は運行軌道, 道路の意に用いられている, 他に「黄道」。
- 26) 荒川前掲書55頁を参照。
- 27) 沈前掲論文参照。
- 28) ワイリーかエドキンズになるが前者の可能性はより大きい。
- 29) 『職方外紀』『海国図志』『地理備考』『地理全志』では「亜麦裏加」が未出。1864年の改訂版でレッグは「亜墨利加」に改めた。
- 30) 蘇精前掲書55~78頁。